

## [調査研究]

## 西洋古代史・古典学研究における 批判的校訂本シリーズの利用・管理法に関する一考察

— *The Loeb Classical Library* を中心に —

遠藤 直子

### はじめに

2020（令和2）年3月18日、ハーバード大学出版局がオンライン版 *The Loeb Classical Library*<sup>1</sup> の6月30日までの無料公開を発表した<sup>2</sup>。世界規模で蔓延しつつある新型コロナウイルスにより、多くの人々が図書館の利用を制限されている状況を受けての措置であった。その翌日に筆者の訴えを容れていただいた結果、3月30日には東北大学附属図書館からも同オンライン版叢書へのアクセスが可能となった。

*The Loeb Classical Library*（ロウブ古典叢書、以下Loebと略記する）は古代ギリシア語およびラテン語で書かれたいわゆる一次史料の批判的校訂本で、対訳が英語という手軽さもあり、西洋古代史や古典学、美術史、言語学、哲学、建築学、さらには医学や歯学の分野の研究者に至るまで幅広く利用されているものである。昨年度の『東北大学附属図書館調査研究室年報』でも触れたが<sup>3</sup>、本館地下書庫内のLoebの配架が（おそらくは整備法が曖昧なまま長く放置されてきたゆえに）非常に乱雑な状況になっていたことを、筆者は着任以来気にかけてつも思いあぐね、手をつけかねていた。コロナ禍における部分開館時にも何件か当該シリーズの予約貸出の依頼を受け、そのたびに目あての巻号を見つけ出すのに少々手間取る<sup>4</sup>（また、このシリーズに詳しくないスタッフにとってはどこに戻したらいいのかもわかりにくい）ことが重なったこともあり、この際にできるだけ明解な出納・配架法を案出しようと思いついた。

そのために、筆者は国内の西洋古代史研究者を対象にアンケートを実施した<sup>5</sup>。設問は全部で12、以下のとおりである。

① 氏名

② 所属機関

③ 一次史料（西洋古典文献、碑文ほか）の校訂本は主に何を使用していますか？（シリーズ名などをお答えください）

④ ③で回答した校訂本は、主にどのような媒体で使用していますか？（複数回答可）

1. 紙版（冊子体）を図書館で借りて
2. 紙版を個人で購入して
3. デジタル版を図書館（学認ほか）などで
4. デジタル版を個人で契約して
5. その他（→⑤へ）

⑤ ④で「5. その他」を選択された方は具体的にお願います。

⑥ 上で回答された媒体で使用されているのはなぜですか？他の媒体・使用法よりも有益と考える点をご回答ください。

⑦ 上で回答された使用法に関して、不足・不便だと感じる点、または、こうであつたらいいという希望があれば、それに関してもご回答ください。

⑧ 大学図書館等で利用する際に（図書リクエスト、書架検索などの場面で）不便だと感じることはありますか？[はい/いいえで回答]

⑨ ⑧で「はい」と回答された方は、どのような点で不便だと感じられますか？

⑩ 紙版（冊子体）の場合、図書館および自宅の書齋にどのような順番で並んでいたら使いやすいと考えますか？

1 <https://www.loebclassics.com/>.

2 <https://www.loebclassics.com/loeb/news/2020/March>.

3 遠藤直子「東北大学における西洋古代史研究 — 附属図書館の有用性と研究の現在・過去・未来 —」『東北大学附属図書館調査研究室年報』7, 2020年, 75～76頁 ([https://tohoku.repo.nii.ac.jp/?action=pages\\_view\\_main&active\\_action=repository\\_view\\_main\\_item\\_detail&item\\_id=131084&item\\_no=1&page\\_id=33&block\\_id=38](https://tohoku.repo.nii.ac.jp/?action=pages_view_main&active_action=repository_view_main_item_detail&item_id=131084&item_no=1&page_id=33&block_id=38))。

4 Loebの背表紙の表記が少々独特である（著者名であつたり書名であつたりして一定していない）うえに、T-LINES（Tohoku University Library Information Network System 東北大学図書館情報処理ネットワークシステム）から出力する確保依頼票やOPACから打ち出すレシートの表示と一致しない（ようにみえる）ことなども、探しづらさ・戻し難さの原因となっている。

5 [https://docs.google.com/forms/d/1cq45frOd1888lxBTh9gfWmljbiHF7RKK9ObkQCMXNjo/viewform?edit\\_requested=true](https://docs.google.com/forms/d/1cq45frOd1888lxBTh9gfWmljbiHF7RKK9ObkQCMXNjo/viewform?edit_requested=true)（受付終了）。

1. 著者の名前順
2. 成立年代順
3. 発行年代順
4. シリアルナンバー順
5. その他 (→ ⑩)

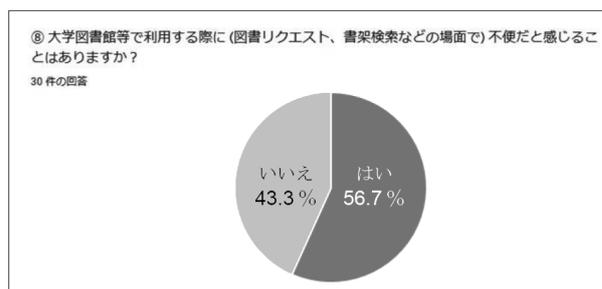
⑩ ⑩ で「5. その他」を選択された方は、具体的にお願いします。

⑫ 自由記入欄 (この件で大学図書館に期待すること他、この問題に対するご意見・ご提案等)

結果、30件の回答を得た。いずれも予想を超えた熱量で、当初は批判的校訂本シリーズのより有効な配架整備法の参考になればくらいに想定していたことが、図書館というものの姿勢、ひいてはその存在意義にまでかかわる問題であると改めて考えさせられることとなった。

なお、当アンケートはあくまで研究者・利用者目線でどのような問題や希望があるかを問うものであり、大学図書館間に優劣をつけたり特定の機関を批判したりすることが目的ではないため、回答者と回答内容が結びつくことは極力明記しないこととする<sup>6</sup>。また、回答の中には批判的校訂本には直接関わりのない要望なども多く含まれており、筆者個人としてはもともとであると頷くものばかりではあったが、各々の図書館の裁量が大きく影響するものである事柄に関しては言及を避けることをあらかじめ申し述べておく。

【図1】アンケート回答 (設問⑧)



## 1. 東北大学における批判的校訂本シリーズの所蔵状況

東北大学所蔵の西洋古代に関する主な批判的校訂本シリーズは、*The Loeb Classical Library*<sup>7</sup>、*Bibliotheca Scriptorum Graecorum et Romanorum Teubneriana* (Teubner版)<sup>8</sup>、*Collection des universités de France* (Budé版)<sup>9</sup>、*Scriptorium Classicorum Bibliotheca Oxoniensis* (Oxford Classical Texts, OCT)<sup>10</sup> などがあるが、以下ではアンケート結果からももともと使用率の高いシリーズである<sup>11</sup> Loebを中心に考察していく<sup>12</sup>。

### 1.1 所蔵状況

本学における Loeb の所蔵数は 528 件・2815 冊であり<sup>13</sup>、現在出版されている 545 タイトルのうちの大半は揃っているということになる。所在は“本館書庫”が 1083 冊、“本館書庫旧教養<sup>14</sup>”が 605 冊、“本館書庫旧片平<sup>15</sup>”が 422 冊、“本館書庫 BF2 小宮文庫”が 1 冊、“本館書庫 BF2 中野文庫”が 4 冊、“本館書庫 BF2 旧二高”が 1 冊、

6 ご回答いただいた 30 名およびメーリングリストにてアンケートを周知していただいた古代史の会と古代史研究会 (<https://kodaishiken.client.jp/>) には、この場をお借りして心より感謝申し上げます。回答者の氏名および所属機関に関しては、アンケートは本来無記名で行なうものであることに鑑み公開を差し控えるが、所属やポストにより生じる回答の相違、すなわち図書館および研究機関の利用範囲・利便性の落差は思った以上に大きく、学界の安定的な存続・発展のためにも、今後何らかの形で解決されていくべき問題であると深く考えさせられたものである。

7 [https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac\\_details/?lang=0&camode=11&place=&bibid=TT28002537&start=&opkey=B161164205990566&bbinfo\\_disp=1](https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac_details/?lang=0&camode=11&place=&bibid=TT28002537&start=&opkey=B161164205990566&bbinfo_disp=1)。以下、OPAC の情報は 2021 (令和 3) 年 2 月現在のものである。

8 [https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac\\_details/?lang=0&camode=11&place=&bibid=TT28002316&start=&opkey=B161164208860009&bbinfo\\_disp=1](https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac_details/?lang=0&camode=11&place=&bibid=TT28002316&start=&opkey=B161164208860009&bbinfo_disp=1)。

9 [https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac\\_details/?lang=0&camode=11&place=&bibid=TT28005503&start=&opkey=B161164211623615&bbinfo\\_disp=1](https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac_details/?lang=0&camode=11&place=&bibid=TT28005503&start=&opkey=B161164211623615&bbinfo_disp=1)。

10 [https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac\\_details/?lang=0&camode=11&place=&bibid=TT28006453&start=&opkey=B161164223854578&bbinfo\\_disp=1](https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac_details/?lang=0&camode=11&place=&bibid=TT28006453&start=&opkey=B161164223854578&bbinfo_disp=1)。

11 30 名中 24 名が挙げていた。

12 ほか、回答のあった一次史料で東北大学に部分的にでも所蔵のあるものを参考サイトと共に挙げておく。*Corpus Inscriptionum Latinarum* (CIL) [<https://arachne.uni-koeln.de/drupal/?q=en/node/291>]、*Inscriptiones Latinae Selectae* (ILS) [<https://archive.org/details/inscriptioneslat01dessuoft>]、*Inscriptiones Graecae* (IG) [Attic Inscriptions Online (AIO) <https://www.atticinscriptions.com/>]、*Inscriptiones Graecae ad Res Romanas Pertinentes* (IGR) [<https://archive.org/details/inscriptionesgra04cagnuoft>]、*Supplementum Epigraphicum Graecum* (SEG)

[<https://referenceworks.brillonline.com/browse/supplementum-epigraphicum-graecum/> / <https://mirai.kinokuniya.co.jp/catalog/supplementum-epigraphicum-graecum-online/>]、*Thesaurus Linguae Graecae* (TLG) [<http://stephanus.tlg.uci.edu/>]、*Monumenta Asiae Minoris Antiqua* (MAMA) [<http://mama.csad.ox.ac.uk/>]、*Corpus Christianorum* (CC) [<https://www.corpuschristianorum.org/>]、*Sylloge Inscriptionum Graecarum* (SIG / Syll.) [<https://epigraphy.packhum.org/book/347?location=1703>]、*Oriens Graeci Inscriptiones Selectae* (OGIS), *Corpus Scriptorum Ecclesiasticorum Latinorum* (CSEL) [<http://www.earlymedievalmonasticism.org/Corpus-Scriptorum-Ecclesiasticorum-Latinorum.html>]、*Monumenta Germaniae Historica* (MGH) [<https://www.mgh.de/>]、*Die griechischen christlichen Schriftsteller der ersten Jahrhunderte* (GCS) [<https://www.bbaw.de/forschung/die-griechischen-christlichen-schriftsteller>]、*Sources Chrétiennes* [<https://sourceschretiennes.org/>]、*Patristische Text und Studien* [<http://www.theologische-buchhandlung.de/patristische-texte.htm>]、*Inschriften Griechischer Städte aus Kleinasien* (IK) [<https://ifa.phil-fak.uni-koeln.de/zeitschriften-reihen/inschriften-griechischer-staedte-aus-kleinasien-ik>]、*Die Fragmente der griechischen Historiker* (FGH) [<http://www.dfhg-project.org/>]、*Patrologia Graeca* [<http://patristica.net/graeca/>]、*Patrologia Latina* [<http://patristica.net/latina/>]、*The I Tatti Renaissance Library* [<https://www.hup.harvard.edu/collection.php?cpk=1145>]、*Bristol Classical Press* [<https://blackwells.co.uk/bookshop/search/publisher/Bristol%20Classical%20Press>].

13 Teubner 版は全 842 件・1128 冊。Budé 版は全 509 件・1098 冊。OCT は全 118 件・310 冊である。

14 1973 (昭和 48) 年に現在の附属図書館本館が開館した際に統合された旧・教養部分館所蔵の資料で、地下書庫の旧分類と称される区画に配架されている。日本十進分類法を採用している。

15 片平キャンパスの旧・附属図書館本館 (現・史料館) から現在の本館に統合された資料で、旧教養と同じく旧分類とされる。東北大学独自の分類法が用いられている。

“本館2号館準貴室晩翠文庫”が1冊，“本館書庫梱包(洋)”・“本館書庫梱包済(利用不可)”・“本館書庫BF1レファレンス整理中(利用不可)”が合わせて532冊<sup>16</sup>，研究室所在のものが合計152冊，“教育図書室”所在が1冊，“北青葉山分館1階図書”が1冊，“北分科学概論旧蔵書”が4冊，“北青葉山分館2階集密(図書)”が1冊である。

確認できる最古の受入日は1924年9月3日，旧片平所在のものである。対して，最新の受入は2020年7月22日の教員による購入・研究室への寄贈であるが，これは出版年が2017年という比較的新しい版であった<sup>17</sup>。

## 1.2 利用頻度

貸出回数でみると，最も多かったものはAmmianus Marcellinus vol. 1 (請求記号IC2/L5，資料番号01601729756)<sup>18</sup>とThe Works of the Emperor Julian vol. 1 (請求記号US1/4，資料番号01810375025)<sup>19</sup>の2冊が同数の18回であるが<sup>20</sup>，1人の利用者が貸出延長をした場合も回数に含まれるため，必ずしもこれらのタイトルの人気が高いという証左にはならない。

対して，2815冊中2159冊は貸出回数が0であるが，これはあくまで図書館システムに登録後のことであり，マニュアル貸出時代の記録はカウントされておらず，またLoebは貸出処理を受けずに館内閲覧のみされるというケースもままあるため，単純に利用頻度が低いという根拠にすることはできないであろう。

## 1.3 配架状況

もっとも問題が顕著にあらわれているのは新分類<sup>21</sup>，“本館書庫”所在のものである。まず，配架場所(請求記号)が分散してしまっている。US1/4が951冊と大半を占めているほか，GA54/2が60冊<sup>22</sup>，HC21/165が16冊，あとは1冊のみ独立的な請求記号が，あるいは2～5冊まとまって個々の請求記号が，それぞれ割り振

られている状態である<sup>23</sup>。

GA54/2の書誌情報(註22のリンク先参照)を見ると，同じ書誌情報内に新分類と旧分類が混在しており，さらに同一タイトル・同一版・同一巻号のものが新分類だけでも3～5冊配架されていることがわかる。新分類洋書の複本は2冊までという原則(註16参照)から外れているし，新分類にも旧分類にも同じものが複数配架されていることに特段の意義は見出せない。資料の登録情報を調査した結果，当初は2冊のみ配架されていた<sup>24</sup>ところに研究室や図書室からの納庫<sup>25</sup>もしくは受贈<sup>26</sup>されたものが加わっていることが判明した。1990年代から2000年代半ばあたりまでは配架冊数の原則が現在とは異なっていたことに起因するようである。

東北大学所蔵で1件しか登録がない請求記号GA47/62をOPACで検索すると，Ammianus Marcellinusがヒットする<sup>27</sup>。これは前述の資料番号01601729756(註18参照)とは別書誌でもう少し新しい版であるが，全3巻<sup>28</sup>中，1巻がGA47/62(資料番号00890114933)で，2巻がUS1/4(01810198163)という具合に同一版のものが巻ごとに別々の所在・分類になってしまっている(この版の3巻は所蔵なし<sup>29</sup>)。

先述の，より古い版(註18)ならば旧片平所在のものが3巻まとまっているが(請求記号IC2/L5，資料番号01601729756・01601729764・01601729772)，旧教養には同一版の1巻が欠けており2巻(089/2/315，01800147351)と3巻(089/2/331，01800148028)しか所蔵がない<sup>30</sup>。

このように，書誌が異なっても(つまり版違いなどであっても)請求記号は同じであったり，書誌が同一なのにもかかわらず所在や分類，請求記号が違っていたり，請求記号は同じでも所在が複数に分かれている，という具合に統一性がないケースが非常に多い。また，巻号がきちんと揃っていない，反対に同じ巻号が余るほど存在しているという事例も少なくはない。

16 洋書の場合，書誌情報が同一のものは基本的に2冊までしか本館書庫(新分類)に配架されない(先に旧分類に所在があったものは別とする)。研究室からの納庫などで同一の複本が戻った場合，3冊目以降は“本館書庫梱包(洋)”・“本館書庫梱包済(利用不可)”・“本館書庫BF1レファレンス整理中(利用不可)”などに所在変更され，通常利用はできない状態となる。“梱包”(=重複につき別置する)という所在が設置されたのは2004年の法人化以降らしい。

17 研究室所在のものは，通常時であれば近接研究員の構成員ならば直接借り受けに行くことが可能であろう。他研究科所属などの場合は図書館を通して閲覧・貸出が可能となることもあるが，同タイトルが図書館に所蔵されている場合は謝絶される可能性もある。

18 [https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac\\_details/?reqCode=fromlist&clang=0&amode=11&bibid=TT21323063&opkey=B161354410416624&start=1&totalnum=1&listnum=0&place=&list\\_disp=20&list\\_sort=0&cmode=0&chk\\_st=0&check=0](https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac_details/?reqCode=fromlist&clang=0&amode=11&bibid=TT21323063&opkey=B161354410416624&start=1&totalnum=1&listnum=0&place=&list_disp=20&list_sort=0&cmode=0&chk_st=0&check=0)。

19 [https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac\\_details/?reqCode=fromlist&clang=0&amode=11&bibid=TT21092494&opkey=B161354422642513&start=1&totalnum=1&listnum=0&place=&list\\_disp=20&list\\_sort=0&cmode=0&chk\\_st=0&check=0](https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac_details/?reqCode=fromlist&clang=0&amode=11&bibid=TT21092494&opkey=B161354422642513&start=1&totalnum=1&listnum=0&place=&list_disp=20&list_sort=0&cmode=0&chk_st=0&check=0)。

20 2021(令和3)年2月1日現在。

21 現在の本館が開館後に受入れられた資料で，国立国会図書館分類法が適用されている。

22 60冊すべてが同一タイトル・同一書誌である([https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac\\_details/?reqCode=fromlist&clang=0&amode=11&bibid=TT20011708&opkey=B161345030239197&start=1&totalnum=2&listnum=0&place=&list\\_disp=20&list\\_sort=0&cmode=0&chk\\_st=0&check=00](https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac_details/?reqCode=fromlist&clang=0&amode=11&bibid=TT20011708&opkey=B161345030239197&start=1&totalnum=2&listnum=0&place=&list_disp=20&list_sort=0&cmode=0&chk_st=0&check=00))。

23 国立国会図書館分類表(NDLC)によれば，USは一般叢書・雑著，GAは世界史，HCはヨーロッパ・アメリカの哲学・宗教の分野を示す。

24 受入年が概ね1993～1999年。

25 所在変更年はすべて1994年。

26 受贈年はすべて2006年。

27 [https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac\\_details/?reqCode=fromlist&clang=0&amode=11&bibid=TT20149254&opkey=B161354377781230&start=1&totalnum=1&listnum=0&place=&list\\_disp=20&list\\_sort=0&cmode=0&chk\\_st=0&check=0](https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac_details/?reqCode=fromlist&clang=0&amode=11&bibid=TT20149254&opkey=B161354377781230&start=1&totalnum=1&listnum=0&place=&list_disp=20&list_sort=0&cmode=0&chk_st=0&check=0)。

28 <https://www.loebclassics.com/search?q=Ammianus+Marcellinus>。

29 3巻のみ，さらに新しい版の所蔵はある([https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac\\_details/?reqCode=fromlist&clang=0&amode=11&bibid=TT21092158&opkey=B161354487178476&start=1&totalnum=1&listnum=0&place=&list\\_disp=20&list\\_sort=0&cmode=0&chk\\_st=0&check=0](https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac_details/?reqCode=fromlist&clang=0&amode=11&bibid=TT21092158&opkey=B161354487178476&start=1&totalnum=1&listnum=0&place=&list_disp=20&list_sort=0&cmode=0&chk_st=0&check=0))。

30 旧教養所在のLoebの請求記号の3段目はLoebの公式のシリアルナンバーを用いた数字になっている模様。

こうなってしまったのはその時々の方針に則つてのことであろうが、機械的に処理してきた結果、利用者にとっての使いやすさという視点が置き去りにされてしまった感否めない<sup>31</sup>。

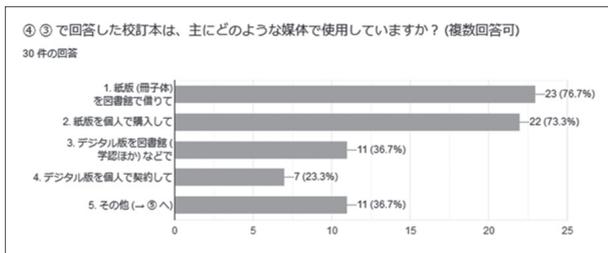
蔵書の数も質も誇るべきものであり、研究の環境としても申しぶんのない東北大学において、この状況は大いに憂うべきことではないだろうか。

## 2. 利用者の視点から

### 2.1 利用のかたち

校訂本シリーズをどのように利用するか・したいかに関しては、アンケートの意見が分かれた。半数が学認もしくは個人契約<sup>32</sup>でのオンライン版を使用していると回答している（ただし冊子体と併用しているというパターンが多かった<sup>33</sup>）。デジタル媒体ならば基本的に利用する場所を選ばず、持ち運ぶ手間もかからない、収容スペースもとらない、誰かが借りていることで使えないという心配がない、（論文などに引用するに際して）コピー＆ペーストがしやすいという点でメリットがあるということであった。

[図2] アンケート回答（設問④）



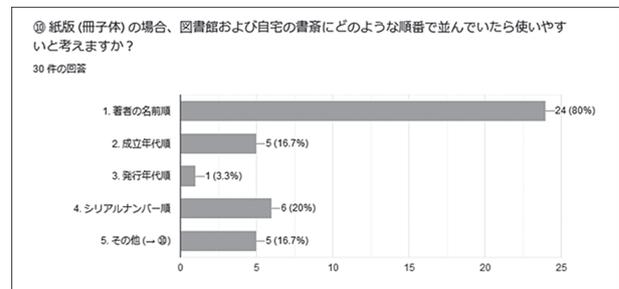
他方、デジタル媒体を意識したことがあまりなく、紙媒体を好むという意見も根強いと感じた。冊子の場合

やはりページを繰るという作業がなじみやすいのであろうし、複数の版やシリーズを突き合わせる際には本の形をしている方が（現在普及しつつあるデジタルペーパーなどと比較しても）利用しやすいであろう。また、物としての書物を大事にしたいという見解もみられた<sup>34</sup>。

### 2.2 理想的な配架法とは

図書館に Loeb を配架するにあたってもっとも無難な配架方法は、出版元によって付されるシリアルナンバー<sup>35</sup>順にすることだろう<sup>36</sup>。しかしそうすると、ギリシア語（緑表紙）とラテン語（赤表紙）のものが混じって、同じ著者による同一タイトルであっても巻号が異なれば離れて並べられることになり<sup>37</sup>、この分野の専門家からしてみれば理想的とはいいがたく、むしろ非常に使い勝手が悪い並びになってしまう。しかし、図書館スタッフの全員に西洋古代の知識があるのならともかく、できる限り速やかに目あての巻号を出納し、何よりも安全に元の場所に戻さねばならないことを考えると、現時点ではこれが精一杯である。並びはシリアルナンバー順であること・シリアルナンバーは OPAC のどこを見ればわかるのかを示した貼り紙を書架に掲示してわかりやすさを図っているが、旧分類に配架されている分に関しては OPAC の書誌情報にシリアルナンバーの記載がないことがほとんどであり<sup>38</sup>、混乱を招く可能性も否定できない。

[図3] アンケート回答（設問⑩）



31 顕著な例をいくつか挙げておく。Dionysius of Halicarnassus ([https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac\\_details/?reqCode=fromlist&lang=0&camode=11&cbid=TT20221910&opkey=B161356940453013&start=1&totalnum=1&listnum=0&place=&list\\_disp=20&list\\_sort=0&cmode=0&chk\\_st=0&check=0](https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac_details/?reqCode=fromlist&lang=0&camode=11&cbid=TT20221910&opkey=B161356940453013&start=1&totalnum=1&listnum=0&place=&list_disp=20&list_sort=0&cmode=0&chk_st=0&check=0)): Herodotus ([https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac\\_details/?reqCode=fromlist&lang=0&camode=11&cbid=TT20149259&opkey=B161356934935684&start=1&totalnum=1&listnum=0&place=&list\\_disp=20&list\\_sort=0&cmode=0&chk\\_st=0&check=0](https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac_details/?reqCode=fromlist&lang=0&camode=11&cbid=TT20149259&opkey=B161356934935684&start=1&totalnum=1&listnum=0&place=&list_disp=20&list_sort=0&cmode=0&chk_st=0&check=0)): Xenophon ([https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac\\_details/?reqCode=fromlist&lang=0&camode=11&cbid=TT20032017&opkey=B161356947150175&start=1&totalnum=1&listnum=0&place=&list\\_disp=20&list\\_sort=0&cmode=0&chk\\_st=0&check=0](https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac_details/?reqCode=fromlist&lang=0&camode=11&cbid=TT20032017&opkey=B161356947150175&start=1&totalnum=1&listnum=0&place=&list_disp=20&list_sort=0&cmode=0&chk_st=0&check=0)): Plutarch's Moralia ([https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac\\_details/?reqCode=fromlist&lang=0&camode=11&cbid=TT20295874&opkey=B161356952899906&start=1&totalnum=1&listnum=0&place=&list\\_disp=20&list\\_sort=0&cmode=0&chk\\_st=0&check=0](https://opac.library.tohoku.ac.jp/opac/opac_details/?reqCode=fromlist&lang=0&camode=11&cbid=TT20295874&opkey=B161356952899906&start=1&totalnum=1&listnum=0&place=&list_disp=20&list_sort=0&cmode=0&chk_st=0&check=0)).

32 <https://www.hup.harvard.edu/catalog.php?isbn=9780674425088> / <https://www.hup.harvard.edu/about/order-digital-products.html>.

33 オンライン版の Loeb は信用度が低く（ミスがあるという意味で）冊子版の校訂本で最終チェックが必須であるということ（日本ではあまり聞かないものの）英国の古代史研究者の間では共通認識となっているということである。また、史料

番号での検索ができない、冊子体にはある索引がない（全著作を横断するキーワード検索はできる）ということにも留意しておくべきであろう。

34 豊田浩志 編『モノとヒトの新史料学 —— 古代地中海世界と前近代メディア』勉誠出版、2016年（本館2F学閥GA47/016, 00160050494）：メアリアン・ウルフ著、大田直子訳『デジタルで読む脳×紙の本で読む脳 —— 「深い読み」ができるバイリテラシー脳を育てる』合同出版、2020年（本館2F学閥新着図書UG21/05, 00200039192 ※新着図書は、一定期間学閥での面陳列ののち、“本館2F学閥”に所在変更予定）。

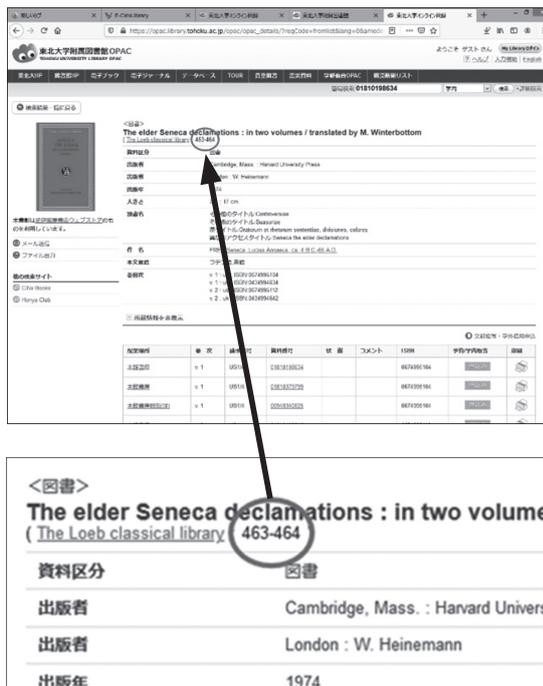
35 基本的に OPAC に表記されるタイトル真下のシリーズ名の脇に併記されている。ただし、ルールの改正により、2020年8月から全国的に OPAC の表示が変更され、全集・シリーズの場合、以前作成されたシリーズ一覧へのリンクが形成されなくなっている点に注意が必要である（シリーズ名での検索は可能）。

36 本館ではすでに2020年末に閲覧係長の指示により、ワークステイの手でシリアルナンバー順での並べ替えが行われた。

37 Loeb のシリアルナンバーはおそらく初版が出た順に振られており、また版を重ねても同タイトル・同巻号の番号は変わらないようである。

38 その代わりといえるかは不明であるが、旧分類の方は著者順に並んでいたりと、背表紙に手書きの通し番号が記入してあるなど、多少の工夫もみられる。

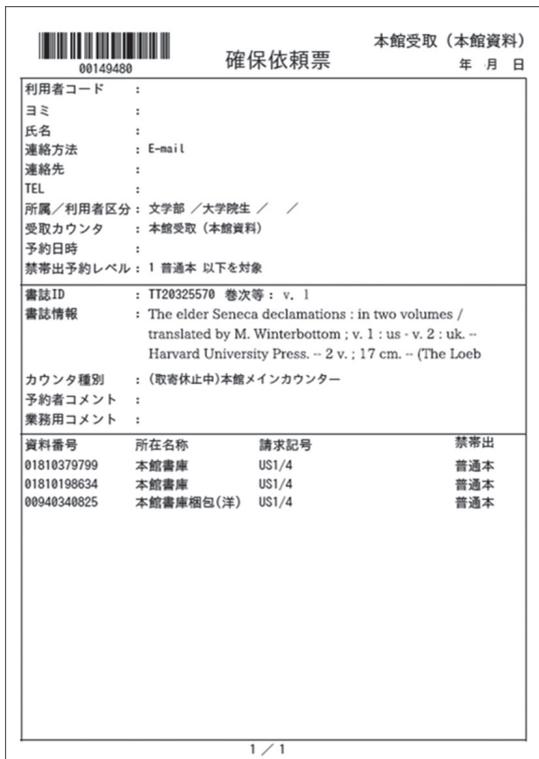
[図4] OPAC 画面 (Loeb のシリアルナンバー)



[図6] OPAC から出力できるレシート。シリアルナンバーも表示されている。  
(シリーズによってはこうした番号が出ない場合もあり、OPAC の表記に注視することが不可欠である)



[図5] 予約貸出時の確保依頼表。書誌情報が途中で途切れ、Loeb のシリアルナンバーが表示されていない。



アンケート結果では、まずギリシア語とラテン語のものは分けた上で、著者名のアルファベット順に、という回答が多かった。筆者としても、研究者目線ではそのやり方が一番使いやすいであろうと考える。また、シリーズならば一箇所にまとまっていもらいたいという意見も多く、特に歴史の長い図書館（東北大学附属図書館も然り）ではその時々の方針などの違いにより、部分的に細目分類されていることが少なくないことを実感した<sup>39</sup>。

ここで筆者が改善策を提案するならば、旧分類と新分類を一度解体したうえで整備し直すことが望ましい。シリーズの所在は統一したうえで、ギリシア語のものとラテン語のものは分け、同一タイトルは全巻まとめて配架し、なおかつ複数の版があるものはすべての版が（比較検討しながら）利用できるようにすべきである。複本は2冊まで配架し、そのほか1冊は予備として別置するとして、冊数が超過している分は（書架のスペースを有効利用するためにも）図書館間でよく行なわれている不要物品の無償譲渡で必要なところへ回すのがよいだろう。

所在は“本館書庫”，請求記号の1段目・2段目は多くの分野を包括する意味でUS1が妥当であろう<sup>40</sup>。3段

39 アンケートによれば、他の総合図書館でもシリーズごとではなく分類ごとに分散され、例えば古代の貨幣に関する書籍が社会科学に分類されているなど、不便な配架法がされているということである。

40 東北大学附属図書館では、US1 はいずれもシリーズものに割り振られた記号である（ちなみにUS1/3 すなわちLoebのすぐ隣に配架してあるのがBudé版で、こちらのシリーズもまたかなり混沌とした状況となっている）。前述のとおり1段目の

目の数字は、US1/5以降もすでに存在しているため、変更はせずにUS1/4のままにするほかはない。

さらに、ギリシア語とラテン語を区別するための第一の、次いでタイトル別に第二の、そして版ごとの第三の、枝番号のようなものを考案しなければならないが、このことに関してはより多くの専門家の意見や海外での事例を参考にする必要はある。

資料番号に関しては、モノとしての本の歴史的価値を重視する意味でも据え置くとして、膨大な件数の書誌を修正し、請求記号ラベルを1冊1冊貼り直し（データの書き換え自体は一括で可能であっても）、大々的な棚移動作業も避けられない。もはや整備というよりは改革というレベルの仕事となることは必至である。

また実をいえば、Loebほか西洋古代の一次史料校訂本に限らず、「わかりにくい」配架のシリーズものは、洋書・和漢書を問わず地下書庫内に無数に存在しているのである。偏りなく、あらゆる分野を研究する人にとって使いやすい図書館、それを実現してこそわれらが東北大学附属図書館であろう。

### 3. 図書館のニューノーマルとは？

#### 3.1 皆の望みがかなうには

アンケートで得た回答をいま一度大まかにまとめると、まずは本邦においては西洋古代～中世の研究は必ずしもメジャーな研究領域とはいえないため、研究の基礎となるべき重要な史料である一次史料校訂本の所蔵先が偏ってしまっていること、所蔵されてはいても不足があること、場合によっては非常に個人的な人間関係が資料の入手の可否に関わることが無きにしも非ずであることなどを危惧する見解が多かった。購入すべき資料の選定に関して、図書館スタッフに当該分野の専門性が不足している場合には、積極的に学内の専門家にコンタクトしてほしいという要望までみられた<sup>41</sup>。

冊子体の校訂本シリーズには、かなりの大判で持ち運びが困難なものもあり、また禁帯出の場合もあるため、図書館にはぜひとも一次史料校訂本を含めた蔵書のデジタル化を推進し、制限無しでの利用が可能な形にしてほしいという希望も多かった。併せて、個人契

約では金銭的な負担が大きすぎることや、所属やポストの変更により、図書館の利用範囲が大幅に変わってしまうことを危ぶむ声も目立った。

配架に関しては、図書館の機能性と専門家にとっての使いやすさの間の齟齬が浮き彫りとなった。

さらに、新しい版が必ずしもそれまでの研究の集大成として質の高い校訂となるとは限らず、古い版であっても、現代の校訂者とは異なる視点や優れた能力でもって翻訳されている（利用する上では研究者自身の裁量や慣れも関わってくる）場合もあるという貴重な意見もみられた。正直、筆者自身これまで版の異同をそれほど重視してきたわけではなかったが、今回の調査はかつての姿勢を改めるよい機会となった。東北大学におけるLoebの新旧分類を統合すべきと考える所以でもある。

大学図書館同士の相互補完関係を強化した全国的な統一検索システムの構築、あるいは分野横断的な専門研究図書館<sup>42</sup>の確立を強く望む声もあった。それに対しては、一図書館員としてというよりは一研究者として、まったくもって同感である、とのみ述べておこう。

#### おわりに — 図書館は誰のものか？

およそ1年前には、図書館に行きたくない日というものがあるとはあったとしても、よもや図書館に行きたくとも自由に行けない日々が訪れるとは、誰も想像すらしなかったに違いない<sup>43</sup>。誤解をおそれずいうならば、2011年の震災後ですら、今よりはずっと図書館の行く手に希望を抱いていられた、そう思う。

いつ終息するかもわからないコロナ禍にあつて、図書館のニューノーマルの意味するところも未だ定かではない中、図書館の存在意義、スタッフの心身の健康の保全と安定した資料提供とは何かをずっと考えてきた。

いわゆる自粛期間中、筆者も短い間ではあったが在宅勤務となり、主にSNSで、海外渡航どころか最寄りの図書館利用も思う存分にはできない状況を嘆く声、特に本務校をもたない非常勤の研究者の苦境を数多く見聞きした<sup>44</sup>。そんな中で、冒頭で述べたハーバード大

USは一般叢書・雑著 (Collected works. Miscellaneous) 2段目の1は書誌 (Bibliography) を意味する。また、地下書庫1階の新分類洋書のエリアの書架はU以降にまだいくらか空いたスペースがあるので、棚移動も比較的スムーズにいくであろうという意味でも、もっとも多くLoebに付されているこの記号に統一するのが最善だと考える。

41 本学においてそれはやや困難な状況であることは、昨年度の『調査研究室年報』の拙稿を参照されたい。

42 たとえば Bodleian Library, Institute of Classical Studies Library, Warburg Institute Library のような、ということであった。

43 昨年来の東北大学附属図書館の対応に関しては、東北大学附属図書館報「木這子」Vol.45, No.2 (通巻165号), 2021年 (<http://www.library.tohoku.ac.jp/about/kiboko/45-2/kbk45-2.pdf>) を参照。

44 当時、SNS上には他罰感情が溢れ、図書館にまつわる論戦には加わらずにいた筆者のなげないつぶやきにさえ飛び火し

てくる始末であったが、一方で細々とであるが助け合いの姿勢や、新たな図書館のあり方を模索する動きがみられたことは僥倖であったと思う。筆者がオンライン版Loebの無料開放のことを知ったのもSNSであった (<https://twitter.com/worldofyuki/status/1240005191526563840>)。第1回名古屋大学高等研究院ウェビナー (高等研究院×未来社会創造機構)「未来を見据えるコロナ禍の研究者たち」 (<http://www.iar.nagoya-u.ac.jp/iarwebinar.php> / <https://youtu.be/LwAacG7L7ZM?list=PL5WhcraCC9LheNvN7vzbWbm8z75yrnpAH>)。特に川本報告 (「コロナの時代の西洋古典学」) は新しい形での図書館利用に関わる示唆に富んでおり、一見の価値ありである。“せんだい歴史学カフェ”第95回「おうちでポチッと歴史の本を～webで手に入るおすすめ歴史学関連文献～」(2020年5月29日 <https://sendaihiscafe.tumblr.com/search/95>) は図書館利用ができない研究者たちによる在宅での資料入手方法に関する意見交換で、電子版やオー

学出版局の計らいは小さな希望に思えた。このサービスは学認ではなかったため、大学入構が大幅に制限された中では恩恵に与ることができた利用者はほとんどいなかったであろうことが残念である。

人数を制限しての出勤時には、訪れる人のないがらんとしたフロア、新品のままバックナンバーを増やしていく定期刊行物に、ありえない図書館の姿をみた。読まれることのない本はみじめであり、機能しない図書館はむなしなものだ。

それぞれの図書館の姿勢が閉鎖的で、例えば所属機関を通してしか相互利用に応じてもらえず、したがって正規の教員もしくは学生でない場合は利用できない事態にたやすく陥ってしまうという意見には、こうした状況下ではことさら耳が痛かった。

たとえ平時であっても、卒業や転属、退職などによって、直接でもオンラインでも、アクセスできない人が取り残され、情報格差が生じることがないようにしてもらいたい、書庫に本があるのなら誰でもアクセスできるようにしてほしい、という声は無視はできないだろう（自分も含めて、要望というものは限りがなく、どこかで線引きをしなければならないことも理解してはいるが）。筆者もかねてより、本学の同窓生や元教職員への図書館利用の範囲拡大の可能性はないものかと思索していたものだが、内側で働く人間の負担を考えると、配架整備の問題と併せて、現段階ではあまり強

くは推せないというのが正直なところである。この事態が落ち着いたら——それは一体いつのことになるのであろうか？<sup>45</sup>

最後に、ある研究者の方からいただいた「大学図書館の実力と意義が学内外で正当に評価されることを期待します」という含蓄のある言葉でもって、拙文を締めくくりたい。

## 謝辞

アンケートにご回答いただいた30名の研究者の皆さまには、惜しみないご協力に改めて感謝申し上げます。新潟医療福祉大学図書館職員の増井洋介氏からはアンケート作成に際して具体的なアドバイスをいただいたこと、名古屋大学大学院人文学研究科西洋古典学分野准教授・川本悠紀子氏には豊富な海外経験をもとに貴重な談話を伺えたことに、重ねて感謝の意を表したい。また、東北大学附属図書館副館長であり筆者の大学院時代の指導教官でもある東北大学大学院文学研究科・文学部広域文化学専攻西洋史専攻分野教授・有光秀行先生と、東北大学総合学術博物館助教・東北大学附属図書館協力研究員の小川知幸先生からは、鋭く客観的な視点でもって数々のご助言を賜った。厚く御礼申し上げます。

(えんどう なおこ、附属図書館情報サービス課)

プリアクセス化された論文である程度はまかなえるが、最新の論文や書籍に関しては、やはり多くの人々が苦勞している様子をダイレクトに伝えるものであった。他方、2020年という年は、研究におけるオンライン化・デジタル化が飛躍的に進んだという意味では（若干不謹慎であるのは承知の上で）怪我の功名といえないこともないのではないかと思う。特に地方在住者にとっては、オンライン化によって、首都圏で開催されることの多い学会・研究会に参加するための時間的・金銭的負担が大幅に軽減したことは歓迎すべきことであろう。『歴史学研究』1000号では“進むデジタル化と問われる歴史学”という非常に興味深い特集が組まれた。永本哲也「Twitterを通じた歴史学の研究成果の発信とコミュニケーション」『歴史学研究』1000, 2020年, 56～61頁；丸島和洋「Twitterを通じた歴史学の成果発信——NHK大河ドラマ「真田丸」時代考証の事例から——」『歴史学研究』1000, 2020年, 46

～50頁。以下、西洋古代関連の研究にとって有用なサイトをいくつか挙げておく。豊田浩志氏（上智大学文学部名誉教授）のサイト“残照の古代ローマ”<http://www.koji007.tokyo/>。河島思朗氏（京都大学大学院文学研究科文献文化学専攻准教授）のサイト“Via della Gatta”<http://www.vdgatta.com/>。増井洋介氏による西洋古代史研究のためのガイドや電子書籍、オンライン資料集[https://note.com/yskmas\\_k\\_66/n/n1d9c0823b3c3/](https://note.com/yskmas_k_66/n/n1d9c0823b3c3/) / [https://note.com/yskmas\\_k\\_66/n/n59093b1f118e/](https://note.com/yskmas_k_66/n/n59093b1f118e/) / [https://note.com/yskmas\\_k\\_66/n/n07771dd0c0bb/](https://note.com/yskmas_k_66/n/n07771dd0c0bb/) / [https://note.com/yskmas\\_k\\_66/n/n8661fa83a972/](https://note.com/yskmas_k_66/n/n8661fa83a972/)。川本悠紀子氏が作成した碑文のオンラインデータベースの利用マニュアル<https://sites.google.com/view/nagoya-classics/teaching-material/inscriptions>。

45 2021年2月17日追記：2月13日の地震によるダメージは甚大で、この1年のコロナ対策で疲弊した図書館に追い打ちをかけるには十分すぎるものであった。